

1. 乳房炎対策を軸とした乳質改善事例

宇佐家畜保健衛生所

○(病鑑) 滝澤亮・木本裕嗣・羽田野昭・(病鑑) 御手洗善郎

【はじめに】酪農家にとって乳房炎は慢性疾病の一つであり、泌乳量を減少させるだけでなく、乳質も低下させるため、生産性に大きく影響を与える。本疾病のほとんどが細菌を原因として発生するが、原因菌種によっては難治性となることから、本疾病による農場主への心的及び経済的重圧は計り知れない。今回、管内の乳房炎多発農場において、乳房炎対策を軸とした乳質改善へ向けた取組を実施したので報告する。

【農場概要】搾乳牛73頭、つなぎ牛舎(対尻式)、従業員2名(夫婦)、2011年4月～2013年1月の平均体細胞数(SCC)27.9万/ml、乳質ペナルティ8回。

【取組内容】①臨床型及び潜在性乳房炎の摘発を目的として、個体毎のSCC測定。②乳房炎原因菌の特定と治療薬の選択を目的として、個体の分房毎の菌分離及び薬剤感受性試験を実施した。治療の優先順位の関係から、SCC30万/ml以上を示す個体から検査を実施し、乾乳中を除き64頭で実施した。③指導については、(i)難治性細菌である *Staphylococcus aureus*(SA) もしくは *Streptococcus uberis*(SU) が分離された場合、1分房からであれば盲乳及び治療後の再検査の徹底、2分房以上からであれば淘汰、早期更新対象とすること。その他の環境性細菌が分離された場合、治療と再検査を実施。(ii)泌乳期での乳房炎発症を予防するため、乾乳期前検査を実施し、間欠排菌する難治性細菌の検出及び乾乳期における抗生剤治療を徹底することとした。

【結果】検査頭数64頭中SCC30万/ml以上は15頭(23.4%)、20万台は4頭(6.3%)、10万台は10頭(15.6%)存在した。またSAは11頭(17.2%)から、SUは4頭(6.3%)から分離され、治療等で好転しない個体の淘汰数は10頭にのぼり、内7頭がSA感染個体であった。取組前後の月別農場平均は、乳質では乳脂肪率が+0.06%、無脂固形分率が+0.03%、総細菌数が-0.09万、SCCが-7.6万/mlとなった。乳房炎治療では治療回数が0.6回減少したものの、治療費は3,902円増加となり、生乳生産量は取組後に4,386kg減少した。

【まとめ及び考察】本取組を実施したことにより、SCC減少等の乳質改善及び生産性阻害牛の特定ができたことは一定の成果であると考ええる。高SCCかつ予後不良により淘汰した個体のほとんどはSA感染個体であり、SA対策の困難性及び重要性を再認識させられた。また問題牛を早期に集中淘汰したことで一過性に生産乳量が減少したことから、計画的な更新の重要性を感じた。しかし、廃棄乳量の減少、搾乳時間の短縮及び搾乳中の不安等が払拭されたことにより、畜主は本取組に手応えを感じており、今後も取組を継続していく意向である。乳質改善を実践しながら生産乳量の維持さらに増加を目指すことは非常に難しく、定期的な問題牛の摘発と計画的な更新が必要となることから、農家の弛まない努力はもちろんのこと、乳質及び乳房炎検査データを基に関係者一丸となった酪農家指導に尽力していかなければならないと考える。